

子どもの本だな 56

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

ゆかいなかえる

ジュリエット・ケペシュ ぶん・え
いしい ももこ やく (福音館書店)

水の中にゼリーのような卵がありました。魚に食べられずに残った4つの卵がおたまじゃくしになり、やがて4匹のかえるになりました。かえるたちは、鬼ごっこやかたつむりのかくしっこをして毎日楽しく遊びます。サギやカメが来ればハスの葉やこうらの上にかくれ、お腹がすくとトンボの卵と水草でおいしいごはんです。夜には動物たちと一緒に歌を歌いました。そして冬が来ると、かえるたちは暖かい土の中で春まで眠りました。

卵からかえり冬眠するまでのかえるたちの1年間のおはなし。かえるたちが愉快地遊びまわる姿が、青、緑、黒、白の4色で生き生きと描かれています。リズムのよい言葉もぴったりで、かえるたちと一緒に楽しく読めるでしょう。読んでもらえば2～3歳から。(池之上)

たのしい川べ

ケネス・グレーアム 作
石井 桃子 訳 (岩波書店)

春の陽気に誘われて地上に飛び出したモグラは川ネズミにであい、ボートでピクニックに出かけました。ごちそうを楽しみボートにゆられているうち、ボートを漕いでみたくてたまらなくなったモグラは、櫂をうばい取って漕ぎはじめました。ボートはあっという間に沈没。しょんぼりするモグラに川ネズミは自分の家で暮らすよう誘いました。ある日、2ひきは箱馬車でヒキガエルと旅行に出かけますが、猛スピードの自動車に馬車をひっくり返されました。ところがヒキガエルは自動車に夢中になり自動車を次々に買っては壊し、ついには…。

美しい川辺を舞台に個性豊かな登場人物が起こす事件がユーモアたっぷりに描かれ、自然の美と神秘を感じる文学性豊かな物語です。読んでもらえば6歳位から楽しめます。(西村)

6月	7月	6・7月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
7日	12日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
14日	19日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
21日	26日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

お知らせ

一日図書館員を募集

本の整理、貸出や分類など、図書館の仕事を体験してみませんか？

日時：7月22日(日)
9:15~18:00

対象：小学6年生~高校生

定員：3名

申込期間：6月27日(水)~
7月16日(月)

『シリアの秘密図書館』

ワ礫から取り出した本で図書館を作った人々
 デルフィーヌ・ミヌーイ 著 藤田真利子 訳 東京創元社 195頁 2018年2月刊 1,600円 (請求記号)016.2

著者はフランス生まれ、イスタンブールに幼い娘と暮らす、中東問題専門のジャーナリスト。

2015年、著者はフェイスブックの「シリアの人たち」というページで、1枚の写真を見つけた。本の壁に囲まれた部屋で、若い男が2人本に向きあっている。ダマスカスから7キロの町ダラヤの秘密の図書館。写真の撮影者アフマドに手がかりをつけ、不安定なインターネットで対話を始めた。ダラヤが封鎖されてから3年近くたっていた。

ダラヤは、2011年、抑圧的なアサド政権に対し正義と平等を求めて声を上げた町の一つだ。政府が最初の銃弾をうちこんだ時、彼らは兵士たちに、この国はわたしたちみんなが生きていけるくらい大きいと、メッセージをつけた水の瓶とバラの花を手渡した。しかし、政府は町を包囲、畑を焼き払い、爆撃を続けた。暴力を拒み平和的な運動を維持しようとした住民は評議会を組織、自由シリア軍の小队を監督下においた。

ある日アフマドは友人の手伝いで、爆撃で崩れた家屋から本を掘り出した。瓦礫の下から集められた本は、汚れを落とし、記録し、分類し、地下の一室に並べられた。戦争が終わったら、元の持ち主に返せるように、最初のページに名前を書いて。看板も名前もない図書館に、戦争の始まる前は本が好きではなかったという若者たちがやってきた。人気のあるのは、自己啓発の本や、14世紀のチュニジアの歴史家がアラブ王朝の衰亡の原因を探った『歴史序説』など。リクエストの多い本は、インターネットからダウンロードして提供される。物資の欠乏状態を生きのびる知恵を集めた雑誌の発行、映画会やワークショップ、討論会、知識を持つものが講師をつとめる大学が生まれ、図書館を拠点に人々がつながり、未来への希望を紡ぐ…。

本は、日々過酷になってゆく日常からの避難所であり、検閲のない、言葉と歴史と考察があふれた新しい場所にくち手助けをしてくれた。図書館は癒やしの場にとどまらず、空気の取り入れ口であった。本書は、本のあふれた世界にいる私に、本と図書館の意味を教えてくれた。(片木)

6月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

7月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

- * カレンダーの×印は休館日
- * は館内整理日
返却のみ受付
(10:00~17:00)
- * 開館時間は
10:00~18:00
金曜日は
20:00まで開館

地下水

托卵なんかしてと憎らしく思うのに、カッコウの声はずっと聞いてみたいと憧れていた。5月半ば、鳥や植物に興味のある仲間と岡山の若杉原生林に足を延ばした。原生林入口で車を降りると、頭上でオオルリがにぎやかに鳴いている。ミソサザイもいたらしい。図書館周辺でも耳にするヤマガラや「ツツピー」も聞こえる。常に鳥の声が響いているのに、姿はほとんど見えない。

植物調査員の腕章をつけた男性に会った。ブナの大木の根元にある10cmにもならないような株が、芽を出して3、4年たったものという。小さな株があちこちに出ているが、それらは大木に囲まれているので大きくなれない。ドイツの森林管理官がそんなことを書いていたなあと思いついた。一本の木を見上げながら、無事大きくなれたこの木は何年ものなのだろうと思うと、本では感じなかった大きなものがずんと心を打った。

頂上でおにぎりを食べていると、谷を挟んだ向こうの山から「かっこう、かっこう」。しばらくすると、「びよー、びよー」とアオゲラの声も。鳥の姿は見られなかったが、念願の「かっこう」が聞けた。緑と鳥の声に包まれたなんともいい時間だった。(竹内)

